

万葉集 卷14 三三五五 作者未詳

あま こ くれ ゆつ
天の原富士の柴山木の暗の時移りなば逢はずかもあらむ

【現代語訳】

天の原にそびえる富士の柴山の、木下闇の季節、この約束の時間が過ぎてしまったら、もう二度と逢えないのではなからうか。

万葉集巻14は東歌が集められたもので、作者は未詳。この歌の柴山とは、山野に自生する雑木が生えている山のこと、富士山麓の森林地帯を表しています。『萬葉集全注』には、「駿東郡と富士郡の境をなす大きな鞍部の西端あたりの十里木部落をさすのであろう」とあります。ここ、富士山資料館周辺のことが詠まれているのかもしれませんが。



写真：十里木からの富士山

万葉集 卷14 三三五六 作者未詳

やまち いも き
富士の嶺のいや遠長き山道をも妹がりとはばけによはず来ぬ

【現代語訳】

富士の嶺の麓の、やたらに遠く長い山道、そんな道をも、いとしいそなたの許へと思えば、息を切らさずにすすいとやって来た。

駿河の国の相聞歌五首のうちの二首めで、作者は未詳。富士山麓の果てしなく続く、起伏のある長い山道は、十里木街道ではないかとも言われています。

万葉集 卷14 三三五七 作者未詳

かすみ い き いも
霞居る富士の山びに我が来なばいづち向きてか妹が嘆かむ

【現代語訳】

霞の立ち込めている富士の山裾に私が入り込んでしまったなら、どちらの方を向いてこの子は溜息をつくことであろうか。

この歌も前の二首と同じように、十里木近辺のことが詠まれた歌と考えられています。富士山を西に望む人が、富士山南東麓の霞が立ち込めた十里木あたりに入り込んでしまったら、という解釈です。

万葉集 卷14 三三五八 作者未詳

こ なるさわ
さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のごと

【現代語訳】

共寝するのはほんのちょっぴり。逢いたくてならぬ思いは、富士の高嶺の鳴沢そっくり。